

【地域教育実践報告】

紀尾井町キャンパス周辺環境を活用した英語教育の試み

——地域と関わりながら「協創力」を養う——

三國信夫*

キーワード：地域連携、協創力、デザイン

1. はじめに

本稿は、短期大学の前期科目「接客英語Ⅰ」および後期科目「接客英語Ⅱ」における、地域と連携した英語教育活動について報告するものである。

「接客英語Ⅰ」および「接客英語Ⅱ」は、坂戸キャンパスと紀尾井町キャンパスのそれぞれで開講されているが、本稿では特に紀尾井町キャンパスにおける英語教育活動に着目して報告する。それは、短期大学において、坂戸キャンパス周辺地域の資源を活用した授業は多く見られているものの、一方で、紀尾井町キャンパス周辺地域の資源についてはその活用の報告も少なく、また活用そのものがまだ十分ではないと考えられるからである。

そもそも英語教育と地域連携というテーマでの報告や研究も、多くは存在しない。地域の文化を英語で紹介する活動はあっても、地域と関わりながら英語を学ぼうとする試みはまだマイナーであるといえよう。したがって、この授業報告が今後の短期大学のみならず城西大学全体での英語教育の広がりにもわずかでも貢献できれば嬉しいと考えている。

また、本稿では、地域と連携した英語教育を目指すことと並行して、城西大学および城西短期大学の教育目標の大きな柱となった「協創力」をいかに育てていくかということへの試みも併せて記録しておきたいと考えている。

2. 地域と関わる英語教育

英語教育を地域との関わりで実施することは、大学や短期大学よりも小学校や中学校での授業実践が豊富に存在する。今年度の授業を開講するにあたり、地域資源を活用した英語教育にどのような取り組みがなされてきたのかを整理し、それらの取り組みを参考に紀尾井町キャンパスでどのような実践が可能かを模索した。

2.1 英語教育と地域資源の活用

地域資源を活用した英語教育の例として、小学校・中学校で活用されている「地域教材」が挙げられる。

* 短期大学准教授

従来の英語教材であると、学習指導要領の内容に即して編集されるという制限がある以上、どうしても内容が一般的・汎用的になってしまい、学習者の関心をひくことが難しい側面もあった。そこで、学習者の身近な地域的话题を英語教材に取り組みことによって学習者の関心を高め、効果的な英語学習に繋げようとする狙いで地域教材が活用され始めたのであった。また、地域教材を活用することは、学習者の地域に対する関心を高めるという効果も期待された。

具体的な例としては、例えば“Precious Stories of Saitama-ken”は埼玉県を代表する人物や地域の伝統文化、自然等を紹介した地域教材であり、190ページに86の物語が収録されている。また、「おらが群馬のおもてなし英語」は、最近群馬県において増加する外国人観光客に対応するための英語コミュニケーションを紹介する地域教材である。

このように、地域の偉人を紹介したりその魅力を発信したりする地域教材は、主に小学校・中学校の初学者向けの教材として少しずつ数を増やしていると言えよう。

ただ、こうした地域教材を使用した英語学習も、地域の情報を英語で学んだり発信したりすることが中心で、地域と関わるなかで英語を活用するという授業例はまだあまりないと言える。

2.2 紀尾井町キャンパスと英語教育



図2.1 紀尾井町周辺図（パンフレットより）

では、地域の情報を発信すること以上の英語教育をどのように展開できるだろうか。英語を使ってどのように地域と関わっていただけるだろうか。

前述した地域教材は、主に英語教員が作成したものであり、地域のことをその教材を通して生徒が学ぶ、という構成であった。身近な地域のテーマで英語を学び、さらに地域の理解を深めるといふ点では、それももちろん効果があると言えよう。

しかし、生徒（学生）がもっと自ら積極的に地域と関わることはできないだろうか。紀尾井町という地域に対して行動を起こすことで主体的に英語を学ぶことはできないだろうか。それが今年度の「接客英語」で考えた授業テーマであった。与えられた教材で地域について学ぶのではなく、自ら地域に出向いて行ってむしろ自分たちで教材を創り出すことができないだろうか、という狙い

であった。

紀尾井町キャンパスは、恵まれたことに、学生が自ら出かけて行くようなスポットは豊富にある。国会議事堂、最高裁判所、国会図書館、国立劇場、迎賓館などの国の主要施設だけでなく、企業や店舗もたくさんある。また、東京の中心部であることから、訪日外国人旅行者も多く街を歩いており、英語を使うチャンスが多さは坂戸キャンパスの比ではない。したがって、このような資源を学生が積極的に活用しながら英語を主体的に学ぶ機会を作ることができれば、受け身ではない新しい英語教育を生み出せるのではないかと考えた。

3. 英語教育×「協創力」×ディプロマポリシー

地域と関わりながら英語を学ぶことと並行して、短期大学の教育目標でもある「協創力」およびディプロマポリシーとの関係についても授業の狙いとして検討した。以下にその観点について整理したい。

3.1 英語教育と「協創力」の養成

「協創力」は、「周りの人と協力ができ、新しいものを創発できる力」として、城西大学・城西短期大学では、その力を育むことが大事な教育目標であるとされている。

紀尾井町キャンパス周辺の資源を活用しながら英語の教材を創り出す作業を、学生同士が協力しながら達成できれば、地域英語教育を通して「協創力」も養うことができるであろうと考えた。

どのようなモノを創り出せるかは、前期と後期のそれぞれの授業で、参加している学生同士が話し合うなかで決めてもらうこととし、協創の過程で自然と英語についても学んでいくことができるようにすることも授業の狙いと考えた。

3.2 英語教育とディプロマポリシーの達成

「協創力」の養成と共に、ディプロマポリシーの達成も授業に求められる大事な要素である。

城西短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシーでは、自立した社会人として求められる「人間力」を育むことが基本的学習成果とされている。この「人間力」は「前に踏み出す力」「考える力」「協力する力」で構成されているが、これらは2006年に経済産業省により提唱された「社会人基礎力」における「前に踏み出す力（Action）」「考え抜く力（Thinking）」「チームで働く力（Team Work）」に対応している。ここでいう社会人基礎力とは、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を指し、上記の「3つの能力」と「12の能力要素」で体系されたものである。

短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシーに掲げられた「人間力」を育てることが、そのまま社会人として求められる能力を身につけることになると言えるであろう。そこで大切になるのが、学生が実際に受講する授業においてこの「人間力」を構成する「3つの力」を具体的にどのように身につけるべきかということであり、筆者が担当する「接客英語Ⅰ」「接客英語Ⅱ」においてもその成果が求められるのである。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与の方針）】

ビジネス総合学科は、「自立した社会人として求められる人間力」を基本的学習成果と定めています。「人間力」とは、具体的には①前に踏み出す力、②考える力、③協力する力です。

また本学科は、専門的学習成果を「職業人として活躍できる幅広い教養と、英語、情報、メディア、会計、販売・接客、事務処理等のビジネススキル」と定めています。ビジネス総合学科は、学科の所定の単位を修得した人が、以下の能力を身につけていると判断し、短期大学士（ビジネス総

合)の学位を授与します。

- 前に踏み出す力
- 考える力
- 協力する力
- 職業人として活躍できる幅広い教養
- ビジネススキル

表3.1 城西短期大学ビジネス総合学科のディプロマポリシー

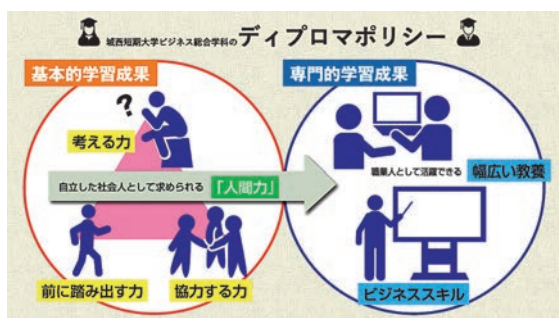


図3.1 城西短期大学ディプロマポリシー
(パンフレットより)

地域に飛び込んで英語を学んでいく過程で、学生同士が、それぞれの考えに基づいた自分の意見を伝え合いながら(考える力)、お互いの意見に耳を傾けながらも協力して(協力する力)、地域の人々と積極的に交流し(前に踏み出す力)、新しい価値を創造する力(協創力)を、この授業を通して育ててもらいたいことを目指した。

以上の複数の視点を踏まえて、紀尾井町キャンパスで展開された2023年度の「接客英語Ⅰ」「接客英語Ⅱ」では、英語教育の新たな試みがなされた。

4. 2023年度前期「接客英語Ⅰ」

ここからは、実際に実施された授業を紹介したい。2023年度前期「接客英語Ⅰ」では、「キッチンカーの英語メニュー」を受講生全員で「協創」することを目指した。以下にその概要を説明したい。

4.1 授業の目標

前期シラバスは以下の通りであった。「接客英語」という名称からもわかるように、レストランや店舗での外国人客を相手にする英語表現を学ぶことが授業の主目的であった。

(1) 授業の概要

語学・基礎

(2) 授業の目的

訪日外国人観光客が急増する昨今、接客業においても外国人観光客への対応が迫られています。

この授業では、実際の接客場面でどのような英語表現を使用したら良いのか、具体的なシーンを想定しながら重要な英語表現を学んでいきます。

(3) 学習成果

就職後にも役に立つ英語が身につきます。

英語を通してコミュニケーション力が身につきます(①前に踏み出す力、③協力する力)。

接客英語を学ぶことで、就職活動の準備もできます（⑤ビジネススキル）。

（４）授業の到達目標

広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力（短大ディプロマポリシーの①）。

社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力（短大ディプロマポリシーの③）。

表4.1 前期「接客英語Ⅰ」シラバス

もともと「接客英語Ⅰ/Ⅱ」では、「英語を使うアクティビティ」を通して、社会に出てからも英語を使えるようにすることを目標にし、さまざまな英語活動に取り組んできたが、しかし、シラバス作成後に地域と関わる授業を展開すること、協創することの必要性を一層感じたため、授業の目標をシラバスから修正（加筆）し、①地域資源を活用して英語を学ぶこと、②受講生全員で「協創」すること、も目指すこととした。

シラバスに加えて地域との関わりや協創について目標を加えたことについては、最初の授業でその必要性とともに受講生に説明し、了承を得た。

4.2 授業の展開

授業は、下表のように実施された。順番に振り返ってみたい。なお、表中の◎は特に重視したもの、○は重視したものを示している。

	接客英語Ⅰ 授業内容	前	考	協
第1回	授業目標の提示、自己紹介	◎		
第2回	アイスブレイキングアクティビティ			◎
第3回	「協創力」を活かしたアクティビティについての話し合いと決定		○	◎
第4回	キッチンカーの店主との交渉とテーマの決定	◎	○	
第5回	英語メニューのデザイン		◎	○
第6回	デザインに基づいた撮影と取材		◎	○
第7回	プロトタイプver.1の完成		◎	○
第8回	プロトタイプをキッチンカーの店主に提示して意見を求める	◎		○
第9回	店主からのフィードバックをもとにポスター&チラシの修正	◎		○
第10回	プロトタイプver.2の完成		◎	○
第11回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第12回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第13回	英語メニューの完成、授業の振り返り		○	◎

表4.2 前期「接客英語Ⅰ」授業展開

4.2.1 授業のはじまり

授業は、「協創」作業を進めるためにも、グループワークを中心に実施した。そして、そのグルー

プワークを活発にするためにも、アイスブレイクとしてカードゲームを活用して、学生同士の距離を縮めることを最初の目標とした。第1回、第2回の授業は、そのために十分な時間を使い、第3回以降の活動が活発に行われる下地を作ることができた。



図4.1 アイスブレイク活動

4.2.2 協創ー英語メニューのデザイナー



図4.2 キッチンカー初訪問

第3回の授業からは、地域と関わりながら、どのようにして協創力を発揮していくかをグループに分かれて話し合った。教室でアイデアを出し続けるグループもあれば、キャンパスの外に出てまち歩きをしながら何が創り出せるかについて話し合っているグループもあった。

紀尾井町キャンパス1号棟を出て道路を渡った場所では、日替わりでキッチンカーが出店している。「接客英語Ⅰ」の実施曜日である火曜日には、焼肉弁当のキッチンカー（暖樂亭）が営業している。一方で、紀尾井町キャンパス周辺は、新型コロナウイルスの感染が収束してきたこともあり、インバウンド客が増加している。ランチの時間帯には、外国人で賑わっているレストランもたくさん見られる。

この状況について着目して、大学周辺地域で、英語を使って①地域と関わり②協創力を発揮できるようなアクティビティを考えている過程で、「地域を賑わせているキッチンカーと増えている訪日外国人旅行者を、英語を使って結びつけるような活動ができないか」というテーマに取り組むこととなった。

第4回の授業では、実際にキッチンカーを訪ねて、英語を使って自分たち学生が何か役に立つことができないかを尋ねてみることにした。

授業が始まって間もなく、みんなで教室の外に出て、キッチンカーを訪ねた。店舗で45年間焼肉屋を経営されていたご夫婦がコロナ禍で店舗を閉めてキッチンカーを始めたこと、東京3か所・神奈川2か所で毎日場所を変えて営業していること、弁当で使用している肉の質には自信があることなど、たくさんのお話を伺った。



図4.3 グループ調査

学生の側から、自分たちが英語を使って役に立てることはないかと質問したところ、「インバウンド客が増えてきたこともあって、英語のメニューを作ってくれれば助かります」というお二人の希望を伺った。

教室に戻った学生は、さっそく、一般的なレストラン等の飲食店の英語メニューについて調べ、メニューにはどのような情報が必要かなどチェックした。

インバウンド客を対象にすると、宗教上の理由で食べられない肉があることもわかり、したがって鶏肉・豚肉・牛肉等の区分をわかりやすく伝える方法などもメンバーで議論した。

第5回の授業からは、実際にデザインをする作業に取り組み始めた。メニューのデザインをする作業は、グループに分かれて進めた。グループでそれぞれの役割を決めて、授業時間だけでなくそれ以

外の時間も使って取り組んだ。焼肉弁当のあたたかいイメージから、メニュー全体のデザインも暖色系でまとめることにした。



図4.5 再検討

第6回、第7回の授業では、メニューに必要な情報の整理もした。原材料から気をつけるべきアレルギー源についての情報をあげるようにするなど、みんなの話し合いによって修正と改善を繰り返していった。メニューを手にする外国人の目線を常に忘れないように心がけた。ここで、プロトタイプver.1が完成した。

第8回授業の際に、デザインしたメニュー（プロトタイプver.1）を、暖樂亭のご夫婦に一度チェックをお願いした。デザインの希望もお聞きした。また、英語の得意な人に英語のスペルや文法の間違いを指摘してもらった。第9回の授業ではそうしたことをすべて修正して、第10回の授業ではまた新しいバージョンのメニューが出来上がった。

どの作業も、グループのメンバーが集まり、確認し合いながら進めた。メンバーと協力しながら作業をすると、自分ひとりでは気が付かなかった視点が得られたり、おもしろいアイデアが浮かんだり、みんなで創造する楽しさを感じることができた。



図4.4 プロトタイプの贈呈



図4.6 デザイン作業

4.2.3 外国人インタビューを経て完成へ



図4.7 インタビュー

数回の修正を加えたメニューを、第11回と第12回の授業で、外国人に実際に見てもらいアドバイスをもらうことにした。4人グループで、紀尾井町周辺を歩いている外国人に英語で声をかけ、メニューの英語の意味が通じるか、もっと良い表現はないか、と質問した。緊張していた学生たちも「前に踏み出す力」を発揮し、最後には全員が声をかけていた。

「Japanese beefではなく wagyuの方がいいよ」など、具体的なアドバイスをたくさん得ることができた。学生たちも英語でコミュニケーションがとれたこと



図4.8 インタビュー

で自信も生まれ、英語に対する学習意欲も高まっているようだった。

「外国人はみんな優しかった」と嬉しそうに話してくれた学生の笑顔が印象的だった。

第13回の授業では、外国人に英語表記についてアドバイスをもらった点について、さっそく修正し、英語メニューを完成させた。

メニュー表面は、暖樂亭の歴史や営業時間や場所についての説明、メニュー裏面は、4種類の焼肉弁当について、名称・材料・値段・特徴が書かれている。日本語や英語がわからない外国人のために、



図4.9、図4.10 インタビュー

イラストでも情報を伝えている。

こうして、すべて学生の手による「英語メニュー」が完成した。



図4.11 英語メニューの贈呈



図4.12 英語メニュー（表）



図4.13 英語メニュー（裏）

5. 2023年度後期「接客英語Ⅱ」

「接客英語Ⅱ」も、短期大学の坂戸と紀尾井町の両キャンパスで、後期に開講されている科目である。前期に引き続き、どのようにしたら紀尾井町キャンパス周辺の環境を活用できるか、学生が興味を持って主体的に活動に参加できるか、を模索した。

5.1 授業の目標

授業の目標は、前期と同様、①地域資源を活用して英語を学ぶこと、②受講生全員で「協創」すること、を目指した。

2023年度のシラバスに記載されている授業の目標は、下表の通りである。接客場面を想定した英語表現の学習がシラバス作成時の授業計画であったが、より地域との繋がりを深め、「協創力」を育てる目的を重視した結果、シラバスとは異なる授業計画を組み直した。この点については初回の授業の

際に学生に説明し、全員の理解を得た。

<p>(1) 授業の概要 語学・基礎</p> <p>(2) 授業の目的 訪日外国人観光客が急増する昨今、接客業においても外国人観光客への対応が迫られています。 この授業では、実際の接客場面でどのような英語表現を使用したら良いのか、具体的なシーンを想定しながら重要な英語表現を学んでいきます。</p> <p>(3) 学習成果 就職後にも役に立つ英語が身につきます。 英語を通してコミュニケーション力が身につきます (①前に踏み出す力、③協力する力)。接客英語を学ぶことで、就職活動の準備もできます (⑤ビジネススキル)。</p> <p>(4) 授業の到達目標 広い教養と、深い専門的な知識や技能を備え、地域社会や国際社会で活躍できる能力 (短大ディプロマポリシーの①)。 社会の多様性に配慮して主体的かつ協同的に実社会で貢献できる能力 (短大ディプロマポリシーの③)。</p>

表5.1. 後期「接客英語Ⅱ」シラバス

5.2 授業の展開

授業は、下表のように実施された。順番に振り返ってみたい。

	接客英語Ⅱ 授業内容	前	考	協
第1回	授業目標の提示、自己紹介	◎		
第2回	アイスブレイキングアクティビティ			◎
第3回	「協創力」を活かしたアクティビティについての話し合いと決定		○	◎
第4回	「紀尾井町まち歩き観光マップ」作成手順の計画	○	◎	
第5回	まち歩きの実施と調査		○	◎
第6回	まち歩きの実施と調査		○	◎
第7回	プロトタイプver.1の完成		◎	○
第8回	英語ナレーションの原稿作成		◎	○
第9回	まち歩きの実施と動画撮影		○	◎
第10回	プロトタイプver.2の完成		◎	○
第11回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第12回	外国人旅行者へのインタビューとフィードバック	◎		○
第13回	「紀尾井町まち歩き英語観光マップ」の完成、授業の振り返り		◎	◎

表5.2 後期「接客英語Ⅱ」授業展開

5.2.1 授業のはじまり

前期「接客英語Ⅰ」と同様に、後期「接客英語Ⅱ」でも「協創」作業に取り組むために、グループワーク中心の授業展開とした。男子学生、女子学生、1年生、2年生がほぼ同数で構成されているクラスでもあり、普段からあまり交流している学生同士ではなかったことから、前期同様、第1回、第2回の授業では、カードゲーム等を活用して、お互いにコミュニケーションをとりやすくなるような環境づくりに専念した。

お互いの名前と顔を覚えたタイミングで、この授業を通して協創力を発揮し、みんなで訪日外国人旅行者の役に立つものを創り出そうという目標を掲げた。その際に、紀尾井町キャンパス周辺の資源を有効に活用することを条件に掲げた。

全受講生10人が5名のグループ2つに分かれて、グループでどんなことを創り出すことが可能かを話し合った。紀尾井町キャンパス周辺には、国会議事堂、最高裁判所、国立劇場、国会図書館、迎賓館等のスポットがあることから、観光案内に関するものが作れるのではないかという意見が両グループとも多くを占めた。

5.2.2 協創—地図づくりのためのまち歩き—



図5.1 自動販売機の説明



図5.2 大手出版社の説明

前期の授業を通して「キッチンカーの英語メニュー」という協創作業の成果物を得る経験をしていたメンバーがいたこともあり、どのように協力すればよいのか、どのようにしてプロダクトを創り上げていけばよいのか、などについて受講生の完成イメージの共有は前期よりも速やかにできていたようであった。第3回の授業では、後期授業において協創作業で取り組むテーマについて議論がなされた。さまざまなアイデアが出された結果、「接客英語Ⅱ」では、キャンパス周辺の「地域観光マップ」作りに取り組むこととなった。まち歩きをすることで、紀尾井町キャンパス周辺の魅力を発見し、その魅力を英語で発信することを目指した。グループで「協創」し、調べ、学ぶだけでなく、モノとして創り出すことを目指した。

第4回の授業では、「地域観光マップ」に掲載する情報や地図の範囲などについて話し合いがなされ、続く第5回、第6回の授業では、実際に紀尾井町キャンパス周辺を散策して、「訪日外国人旅行者が興味を持つようなスポット」を探した。通常の観光マップに掲載されるような場所ではなく、外国人から見て珍しいとか不思議だとか感じられるような場所やモノの情報を中心に地図に記載していくこととした。

第7回の授業では、紀尾井町周辺の地図に、グループごとに、観光名所として紹介するスポットを書き込んで、全体を整えるデザインを行なった。ここでプロ



図5.3 各スポットと説明文

トタイプver.1が完成した。

第8回の授業では、10箇所の観光名所スポットを紹介する英文を考えた。そして第9回の授業では、それぞれのスポットの前に立ってその英文を読み上げて説明する様子を動画として撮影した。第10回の授業では、その動画をYouTube等にアップロードして、そのリンクをQRコード化して、そのQRコードを地図上に貼り付けた。こうしてプロトタイプver.2が完成した。

5.2.3 外国人インタビューを経て完成へ



図5.4 インタビュー

第11回、第12回の授業では、プロトタイプver.2を持って、前期と同様に、外国人に実際にマップを見てもらいアドバイスをもらうことにした。4人グループで、紀尾井町周辺を歩いている外国人に英語で声をかけ、QRコードから動画を見ることができるか、動画の内容を理解できるか（英語が通じるか）、質問した。前期でインタビューを経験していた学生は大して緊張することもなく、「前に踏み出す力」を発揮して声をかけていた。初めての学生も、アクティビティの後半には勇気を持って声をかけることができた。

マップ上の字が小さくて読みづらいこと、動画の音声小さくてよく聞き取れないことなどの改善点を指摘してくれる人もいる一方、地図からQRコードで動画を見られる仕組みが面白いと肯定的な感想を伝えてくれる外国人もいた。

第13回の授業では、インタビューで得られたアドバイスをプロトタイプver.2に反映させて、観光マップを完成させた。



図5.5 QRコードを記載したマップ

6. おわりに

前期と後期に実施された「接客英語Ⅰ」と「接客英語Ⅱ」において、地域と関わる英語教育の試み、英語教育を通して協創力を養う試み、ディプロマポリシーを達成する試み、を以上のように実践した。

どの試みにも改善すべきことが山ほどあるので、こうした課題は来年度以降の授業において少しずつ改善・改良していく必要があると考えている。特に、履修生からのフィードバックがまだ十分にされていないので、この点からまず取り組んでいきたい。

ただ、学生が自ら周囲と協力して新しい価値を創り出そうとする活動（「協創」）を通して英語を学んでいくという試みには、学生のリアクションから感じる印象に過ぎないものの、非常に効果がある試みであると実感している。

参考文献

- 1) 賛田悠 (2019) 「英語で発信埼玉県の魅力」『英語教育』増刊号, 16-17.
- 2) 渡邊美代子 (2019) 「おもてなし英語で地元・群馬県を再発見」『英語教育』増刊号, 24-25.